

小学校外国語活動におけるタイムリーな題材の選択と 自己決定の場の工夫

—発話への意欲が高まる授業を目指して—

横山 恵・岡崎浩幸

小学校外国語活動におけるタイムリーな題材の選択と自己決定の場の工夫

—発話への意欲が高まる授業を目指して—

横山 恵¹・岡崎浩幸²

Timely Theme Selection and Self-determination In Elementary School Foreign Language Activities —Lessons for Increasing Willingness to Speak—

Megumi Yokoyama, Hiroyuki Okazaki

摘要

平成23年に小学校高学年での外国語活動が導入されてから、今年度で7年目となる。これまで、文部科学省が発行した外国語活動教材“Hi, friends!”を生かしながら、児童の興味・関心の高まる題材を新たに開発して授業実践を重ねてきた。

本研究の目的は、「タイムリーな題材の選択」と「自己決定の場の工夫」が発話への意欲の高まりにつながるのかを検証することである。児童の振り返りカードのコメント、実際の会話の内容や活動の様子、共起ネットワークによる児童のコメントの分析結果から、「英語表現や素材への興味・関心」「気付き」「相手意識」等が発話への意欲を示す指標として表れることが分かった。それらの指標は、タイムリーな題材への豊かな関わりや自己決定によるコミュニケーションから生まれるものと捉えることができるだろう。

キーワード：小学校外国語活動、タイムリーな題材、自己決定の場

Keywords : Elementary School Foreign Language Activities, Timely Theme, Self-determination

I. はじめに

1.1 新学習指導要領による新たな動き

平成32年度からの新学習指導要領の実施に伴い、小学校英語の教科化が決まった。年間授業時数については、「外国語活動は、年間35単位時間程度、外国語は年間70単位時間程度の設定である」（文科省、2017）とある。つまり、全面実施の平成32年度には、小学校高学年が年間70コマに倍増し、中学年は年間35コマを新たに実施することになる。こうした授業時数の拡大は、新学習指導要領に向けた移行期の変更点の一つと言える。

こうした新たな動きに対応し、今後文科省から「小学校の新たな外国語教育における新教材（3～6年生用）」が各学校に配布される予定である。文科省の年間指導計画例案を見ると、「夏休みの思い出」「オリンピック・パラリンピック」（6年生用）等、児童にとってタイムリーで興味・関心の高まる題材を用いた単元が組み込まれている。児童が題材をもとに発話への意欲を高めながら、英語によるコミュニケーションを楽しむことを大切にしていると捉える。

1.2 コミュニケーションを大切に

新学習指導要領によると、中学年の「外国語活動」では『聞くこと』『話すこと（発表）』『話すこと（やりとり）』の三つを言語活動として扱い、高学年の「外国語」では、それら三つに『読むこと』『書くこと』を加えた計五つを言語活動として扱うことになる。一見、中学年から高学年へと言語活動の幅が広がり、授業内容も大きく変わるように思える。しかし、「外国語活動」と「外国語」のいずれの目標も「それらの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地（基礎）となる資質・能力を育成することを目指す」（文科省、2017）と記載されていることから、これまでと同様、小学校では英語によるコミュニケーションの楽しさを大切にしていくことに変わりはないだろう。

児童のコミュニケーションへの意欲を高める手立てについて実践を重ねた結果、「タイムリーな題材の選択」と「自己決定の場の工夫」が発話意欲を高める上で有効なのではないかと考えた。本実践をもとに検証したい。

¹ 南砺市立福光南部小学校 ² 富山大学大学院教職実践開発研究科

Ⅱ. 目的

研究の目的は、「タイムリーな題材の選択」と「自己決定の場の工夫」が発話への意欲の高まりにつながるのかについて検証することである。「タイムリーな題材」とは、話題性があり、児童の発達段階や実態に合い、児童の興味・関心の高まる題材とする。そうしたタイムリーな題材を用いて、伝えたい内容を児童が自己決定することが、相手に伝える必要感やコミュニケーションへの意欲の高まりにつながることを、授業実践から検証する。

Ⅲ. 方法

3.1 対象児童

本実践は、2015年6月から2016年11月の約2年間で、富山大学人間発達科学部附属小学校の5年生35名、6年生38名の児童を対象としたものである。外国語活動教材“Hi, friends!”を生かした以下の三つの事例を通して、児童の振り返りカードのコメント、実際の会話の内容や活動の様子から、発話への意欲の高まりを検証する。

事例(1) ようこそ富山へ—What's good in Toyama?—
(H 27・6月～7月実施)

事例(2) 卒業旅行に行くなら
—Where do you want to go?— (H 27・12月実施)

事例(3) 東京オリンピックに行くなら
—What do you want to see at Tokyo Olympics?—
(H 28・11月～12月実施)

3.2 振り返りカードの分析

(1) コメントの分類・整理

単元を通して1枚の書式にまとめた振り返りカードを用意し、授業の終末の5分程度の時間に、児童が授業の感想を記述式で書けるようにした。毎時間の授業後のコメントの内容や言葉そのものを分類・整理し、単元を通しての児童の意識や学びの変容、活動での達成感や気付き、発話への意欲を検証した。

(2) コメント共起ネットワークによる分析

共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、つまり共起の程度が強い語が線で結ばれたネットワークのことである。

本研究では、ソフトウェア KH Coder (樋口、2014)を用い、児童の振り返りカードのコメントの中から共起ネットワークで可視化した結果を分析する。

Ⅳ. 授業の実際

4.1 事例① H 27・6月の実践 ようこそ富山へ —What's good in Toyama?—

(1) タイムリーな題材の提示

「3ヶ月前に北陸新幹線が開通したばかり」「東京と富山の行き来が約2時間でできる」「今までよりも富山の観光客が増えるかもしれない」というタイムリーな時期を捉え、富山の名所や名産品を自己決定しながら発話するという授業を仕組んだ。本校では、富山駅を通学時に利用する児童が多く、富山駅は児童にとって身近な場所でもある。富山駅に外国人の観光客が訪れたときには、それは児童にとって英語を話す絶好の機会となると考えたのである。

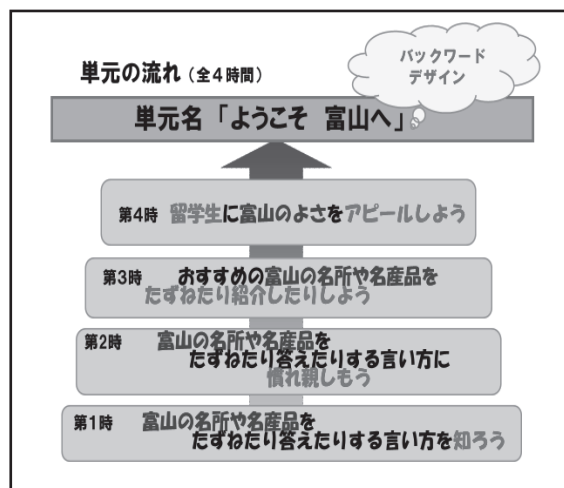


図1: バックワードデザインによる単元構成

図1の単元構成のとおり、富山の名所や名産品を尋ねたり答えたりする言い方を知り(第1時)、それらの言い方に慣れ親しみ(第2時)、友達と伝え合い(第3時)、富山大学の留学生に伝える(第4時)という一連の流れを、ゴールを明確にしたバックワードデザインで仕組んだ。富山大学の留学生との交流をゴールにすることで、児童が「留学生に富山の名所や名産品を伝えよう」「伝える内容を自己決定しよう」という発話への意欲を高めていくと考えたのである。また、伝える対象(友達や留学生)だけでなく、伝える内容(富山の名所や名産品)を明確にすることで、思わず伝えたい必要感が高まるのではないかと期待した。

導入では、富山の名所や名産品をクイズ形式にして画像で提示し、ゴールの第4時のコミュニケーションの場で留学生に伝える内容を児童自身が想起しやすいようにした。図2のように、画像をぼかしてアップで提示しながら“What's this?”と教師が子供に尋ねることにより、写真1のように子供たちはクイズに夢中になりなが

ら、富山の魅力ある名所や名産品を再確認することができた。



図2: クイズで提示した画像の例

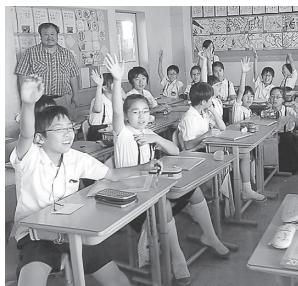


写真1: 名所・名産品クイズを楽しむ様子 (第1時)

名所・名産品クイズの後、下記の基本の英語表現を提示したことで、自分の伝えたい名所や名産品をイメージしながら、案内役と観光客役に分かれて基本の英語表現に慣れ親しむことができた。

案内役: Welcome to Toyama.
 観光客: What's good in Toyama?
 案内役: It's 立山.
 It's beautiful.
 I like 立山 very much.
 観光客: I see. Good & nice.

※囲みは自己決定する内容や英語表現

(2) 自己決定の場の工夫

9 択の画像の中から自分の伝えたい名所や名産品を自己決定できる画像カードを配布し、やりとりを楽しめるようにした。

第3時で友達と紹介し合う段階になると、9 択の画像カードの内容だけで満足せず、写真2のように自分が伝えたい名産品を家から持参してコミュニケーションを楽しむ姿も見られた。



写真2: 富山の名産品をALTに紹介する様子 (第3時)

また、下記のように、自分の思いに合う英語表現かどうかを見直そうとする児童の姿も見られた。

児童: 私は留学生に富山の薬を紹介したいけれど、“I like 富山の薬.” は変だと思う。薬を好きなわけではないし……。できれば、“有名だ”と伝えたいけれど……。

図3にあるように、この児童は “It's nice” や I like 富山の薬 very much.” の英語表現を使わず、ALTから学んだ “It's famous” という新しい英語表現を使って、他の相手とのやりとりを楽しむことができた。この児童の振り返りカードのコメントを見ると、“有名” などのたくさんの英語が分かったし、使えました」とあった。こうした姿は、自分の思いに合う英語表現を見直し、よりよい英語表現を自己決定してコミュニケーションを楽しもうとした姿と捉える。

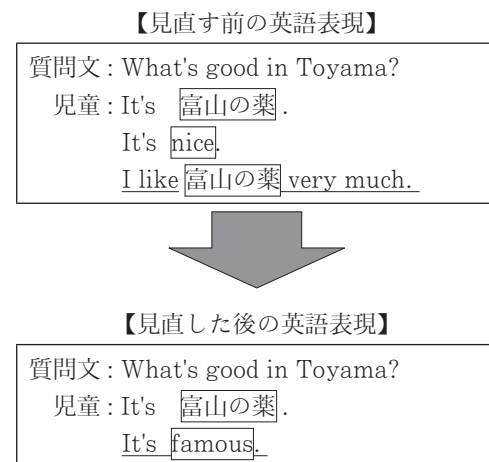


図3: 英語表現を見直す前後の発語の内容

こうして、第4時のゴールの場面では、自分が紹介したい富山の名所や名産品を、自分の思いに合う英語表現を使って生き生きと留学生にアピールする姿が見られた(写真3)。



写真3: 富山のよさを留学生に紹介する児童 (第4時)

(3) コメントの分析

下記の第4時の振り返りカードのコメントを見ると、英語でアピールできた満足感が表れている。また、英語表現への気付きを深め、発話への意欲を高めている様子が伺える。

留学生5人に、「富山の薬」を伝えることができました。「美しい」以外にも「有名」などのたくさんの英語が分かったし、使えました。
富山のよさを紹介できてうれしかったです。(第4時)

こうして、最終場面では自分の選んだ名所や名産品(伝えたい内容)、選んだ理由(使う英語表現)を自己決定しながら、留学生に積極的に富山の魅力をアピールすることができた。また、写真4のように、留学生が自国の文化を紹介する場面もあり、双方にとって有意義な国際理解の場となった。富山をアピールするというタイムリーな題材をもとに、紹介したい名所や名産品を自己決定するやりとりの場が、発話への高まりにつながるのである。

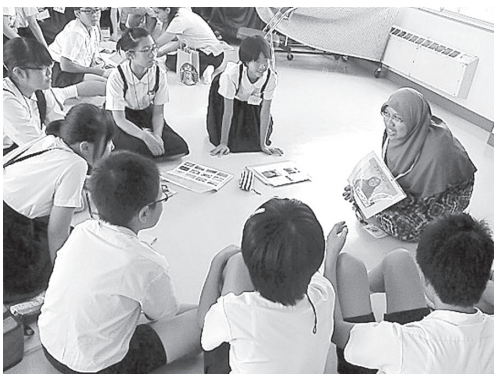


写真4: 自国の文化を紹介する留学生 (第4時)

4.2 事例② H 27・12月の実践

卒業旅行へ行くなら

—Where do you want to go?—

(1) タイムリーな題材の提示

卒業式を3ヶ月後に控えた6年生の児童に「卒業旅行に行くとしたら、どこに行きたい?」と投げかけ、3月に卒業旅行に行く場面を設定して、旅行先を自己決定しながらコミュニケーションを楽しむ単元を仕組んだ。

図4のように、まず行き先や行きたい理由を伝える言い方を知り(第1時)、二択から行き先や行きたい理由を自己決定しながら発話する(第2,3,4時)という三つの場面を単元の中に連続して位置づけることにした。

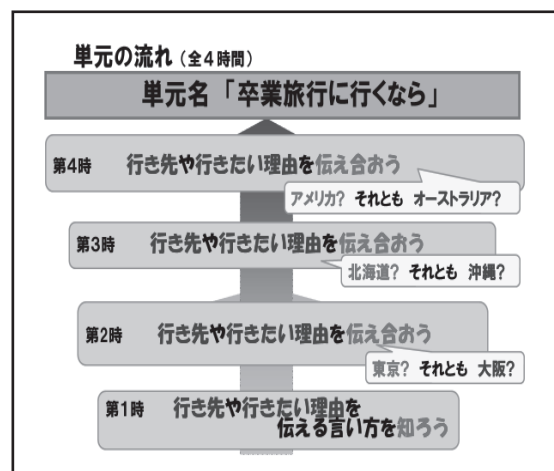


図4: バックワードデザインによる単元構成

(2) 自己決定の場の工夫

下記のように、既習の表現“I like ○○.”等を生かした基本の表現を使って「行き先」と「行きたい理由」を伝えることで、伝えたい内容と英語表現を自己決定しながら発話することにした。

A: Where do you want to go? 東京 or 大阪?

B: I want to go to 東京.

A: 東京? Why?

B: I want to go to ディズニーランド. It's nice.

I want to see ミッキーマウス. It's cute.

I want to eat 東京バナナ. It's delicious.

I like 東京バナナ very much.

B: I see. Good & nice.

※囲みは自己決定する内容や英語表現

また、訪れたい名所や食べてみたい名産品を9択から選択できる画像カードを用意した。初めはカードを見て発話していた子供たちだったが、次第に自分の思いを全体で表現しながら発話をする姿に変容していった。自

自己決定をして思いを伝えることができた結果、自己表現に自信をもち、発話への意欲を高めている姿と捉える。(写真5)



写真5: 画像カードを見ずに自己表現を楽しみ始める子供 (第3時→第4時)

(3) コメントの分析

下記のコメントを見ると、「行きたい場所や理由をうまく英語で言えました」「もっと会話がしてみたい」「話してみたい」などと、単元終了時に課外での発話への期待感を高めている様子が伺える。卒業旅行というタイムリーな題材をもとに行き先(伝える内容)や行きたい理由(使う英語表現)を自己決定することが、発話への高まりにつながっていると捉える。

行きたい場所や行きたい理由をうまく英語で言えました。もっと長い会話がしてみたいです。
 アメリカやオーストラリアの観光名所の中で自分が行きたい場所を英語で言えました。
 次は外国の人と話してみたいです。(第4時)

4.3 事例③ H 28・11月の実践

東京オリンピックに行くなら

—What do you want to see at Tokyo Olympics?—

(1) タイムリーな題材の提示

2015年夏のリオ・オリンピック直後、いよいよ5年後に東京でオリンピックが開催することが決まったタイムリーな時期に、観戦したい競技や選手を自己決定しながら伝え合う授業を仕組んだ。

図5の単元構成のように、観戦したい競技や選手を伝える言い方を知り(第1時)、それらの言い方に慣れ親しみ(第2時)、友達と伝え合い(第3時)、最終場面では中学生とやりとりをする(第4時)という流れを、ゴールを明確にしたバックワードデザインで仕組んだ。小学校時代にお世話になったお兄さんとお姉さんと英語でやりとりをするという、児童にとってやりがいのあるゴールである。

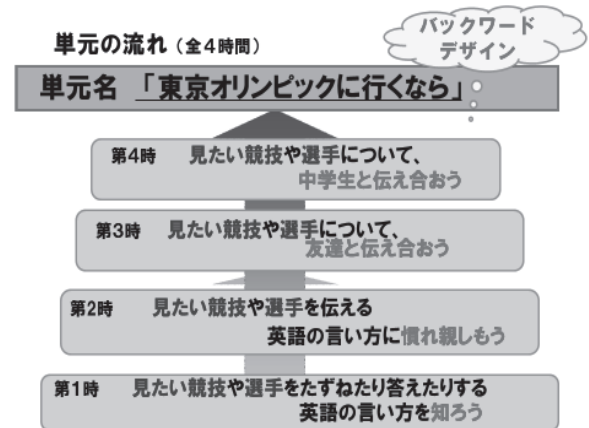


図5: バックワードデザインによる単元構成

(2) 自己決定の場の工夫

下記のように、既習の表現“I like ○○.”等を生かした基本の表現を使って観戦したい「競技」と「選手」を伝え合うことにした。

A: What do you want to see at Tokyo Olympics?
 B: I want to see tennis.
 A: Tennis? Why?
 B: It's amazing.
 I want to see 錦織.
 I like 錦織 very much.
 A: I see. Good & nice.
 ※囲みは自己決定する内容や英語表現

また、観戦したい競技や選手を一覧にした画像カードを配布し、見たい理由（伝えたい内容）をそれぞれ16枚から自己決定できるようにした。写真6のように、3時の会話では、基本の英語表現を使って観戦したい選手や競技を伝え合うことができた。



写真6: 自己決定をしながら会話を楽しむ児童 (第3時)

基本の表現を使ったやりとりに慣れ親しむにつれて、下記のように英語表現を見直そうとする児童の発言が見られた。この児童は、ペアの相手が使った英語表現について、相手により伝わる表現を自己決定して提案したのである。

児童：“It's cool.” って、錦織とテニスのどっちがクールなのか分かりにくいと思う。ぼくだったら“錦織クール”と言いたい。
(第3時)

この児童のコメントから、「It's cool.”よりも“錦織クール”の英語表現を使う方が、選手と競技のどちらが“cool.”(かっこいい)なのか相手に伝わりやすいのではないか」という発話へのアイデアが伝わってくる。また、“It's cool.”の主語をはっきりさせて、もっと相手に伝わりやすい英語表現を使いたいという願いが伝わってくる。こうした児童の姿は、英語表現を積極的に自己決定しながら発話を楽しもうとする姿であると捉える。



写真7: 中学生とのやりとりを楽しむ児童 (第4時)

こうして、写真7のように、第4時の最終場面では少し緊張しながらも、自己決定をしながら憧れの中学生と生き生きと発話する姿が見られた。

(3) コメントの分析

下記のコメントを見ると、会話で使う英語表現を知り、自分の言いたい内容を自己決定し、次時のコミュニケーションへの期待感を高めている思いが伝わってくる。

東京オリンピックの種目の英語の言い方が分かりました。
私だったら、「高松ペアを見たい」と言いたいです。
もっとすらすらと英語を話せるようになりたいです。
(第2時)

また、下記のコメントを見ると、意外な競技や選手を選択した友達への驚きや中学生との会話を心待ちにしている意欲が伝わってくる。他者への気付きや新たな発見が、次のコミュニケーションへの期待感につながっていると捉える。

友達の見たい競技や選手が意外でびっくりしました。次は、中学生との会話がとても楽しみです。
(第3時)

さらに、次の振り返りカードのコメントからは、「中学生と会話ができよかった」という英語でアピールできた満足感が伝わってくる。

これまでの授業で習ったことを中学生との会話につなげることができたので、うれしかったです。
中学生の発音がよくてびっくりしました。中学生と会話ができよかったです。
(第4時)

このように、観戦したい競技や選手（伝えたい内容）といったタイムリーな題材を選択し、使いたい英語表現を自己決定する場の設定をしたことで、友達や中学生と英語で会話ができたといい達成感や満足感を味わうことができた。また、友達の意外な一面の発見（他者への気付き）や、新しい英語表現を知る発見（言葉への気付き）への喜びもコメントに表れていることから、自己決定の場の工夫により児童の発話への意欲が高まったと捉える。

V. 共起ネットワークによる分析

5.1 計量テキスト分析

三つのそれぞれの実践において、振り返りカードの中にある児童のコメントの言葉を分類し、出現頻度が二回以上の単語を利用して、共起ネットワークの図を示した。(図6) ネットワーク図をまとめるときには、集計単位は「文」とし、描画する共起関係の数は、ごく一部の強い共起関係だけを描画した。

なお、解釈はグループ内の単語だけをつなげて行うのではなく、その単語がどのような文脈の中で登場しているかをKH Coderの検索機能を利用し、元のテキストデータを参照しながら行った。

5.2 計量テキスト分析による児童の意識

図6から読み取れることは、主に四点である。

(A) 【英語で名所を伝える喜び】

「英語」「場所」「行く」「自分」という単語のつながりから、「英語で名所を伝える喜び」と名付けた。「富山について英語でアピールできた」「自分の行きたい場所や食べたい物を英語で言えた」というコメントから、伝えたい内容(場所や名所、食べ物等)について英語でアピールできた喜びがコメントに多く書かれていると捉えることができる。

(B) 【理由を伝える楽しさ】

「北海道」「沖縄」「理由」という単語のつながりから、「理由を伝える楽しさ」と名付けた。「北海道と沖縄で、行きたい理由が様々でおもしろかった」などのコメントから、題材への興味・関心を高めながら、選んだ理由を伝え合おうとする姿が伝わる。

(C) 【留学生に富山をアピールする意欲】

「中学生」「会話」「たくさん」の単語がつながっていることから、「留学生に富山をアピールする意欲」と名付けた。児童の実際のコメントの内容を見てみると、「留学生に富山のよさをアピールしたい」「中学生ともたくさん話がしたい」など、進んで対象に関わろうとする積極性や次のコミュニケーションへの意欲が伝わるコメントが多かった。

(D) 【会話の広がり】

「いろいろ」「反応」「使う」という単語のつながりから「会話の広がり」と名付けた。児童の実際のコメントを見てみると「いろいろな反応の言葉を使った」「英語の幅が広がった」など、児童が英語で様々な人と関わる喜びを味わう様子が伝わる。また「中学生と会話がしなくなった」と、コミュニケーションの輪を広げようとする様子も伺える。

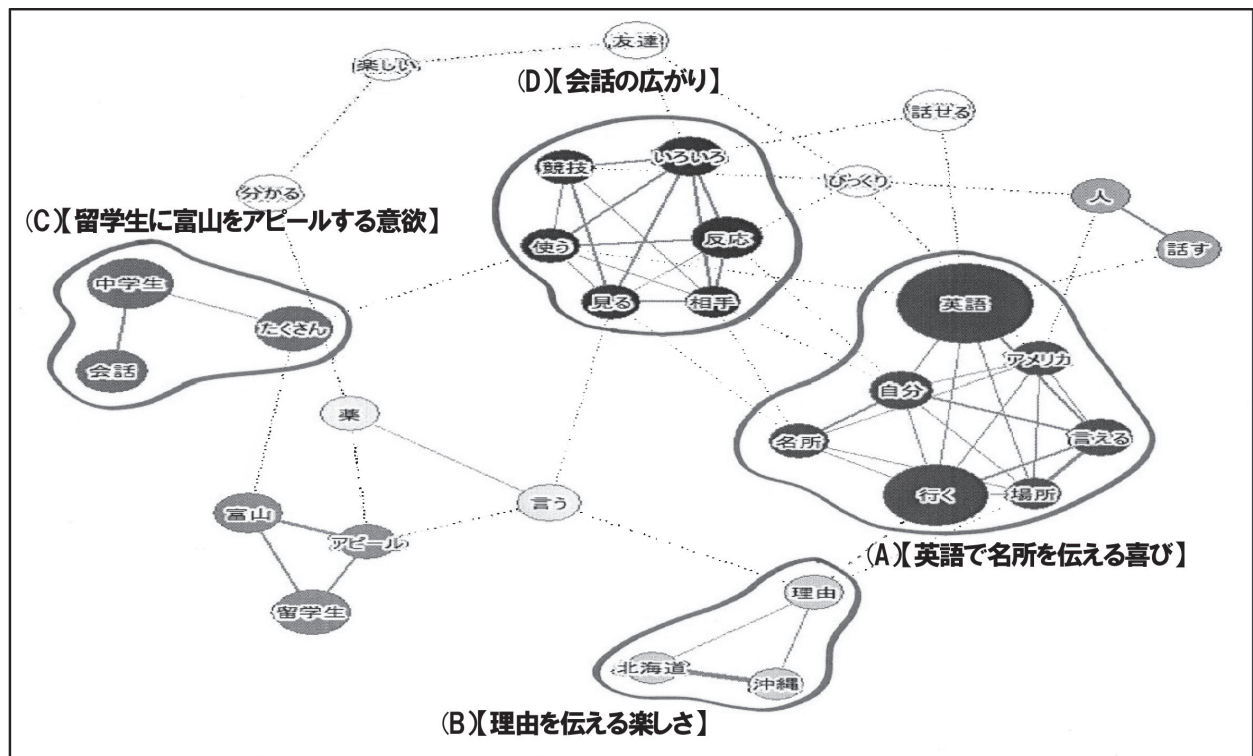


図6: 計量テキスト分析によるネットワーク図

【四つの観点】

VI. コメントの文面からの分析

6.1 児童の四つの意識

事例①～③の3つの実践において、単元全体を通しての振り返りカードのコメントから児童の思いや気付きを読み取って整理した。表1.2.3のように児童のコメントを右の四つの観点到に分類することができた。

ア	英語でアピールできた満足感
イ	次のコミュニケーションへの意欲
ウ	他者への気付き（他者理解）
エ	英語表現への気付き（言語理解）

1	ビデオの中学生の英語がペラペラでした。私もう英語をすらすらと話せるようになりたいです。	英語を話すことへの憧れ	
2	英語ですらすらと話せるように、これからもがんばりたいです。	次のコミュニケーションへの意欲	
3	留学生に富山のよさをアピールしたいです。	次のコミュニケーションへの意欲	
4	いろいろな名所があって、すごいなと思いました。	異文化等への気付き(異文化理解)	
5	進んで英語を話すことができました。「美しい」という英語以外にも、「すてき」などのたくさんの英語を使って、富山について英語で紹介できて、うれしかったです。	英語でアピールできた満足感	英語が伝わったことへの満足感
6	富山の菓をアピールしたいけれど、「I like 菓 very much」と言うのは、変だな。菓を好きなわけでもないし...	英語表現への気付き(言語理解)	
7	留学生に富山のよいところをたくさんアピールできました。分からない言葉がまだたくさんあるので、これからもっと楽しく勉強してみたいです。	英語でアピールできた満足感	次のコミュニケーションへの意欲
8	実は、英語を話せるか初めは心配でした。でも、実際にやってみると、楽しくコミュニケーションをかわすことができてよかったです。	英語が伝わったことへの満足感	
9	留学生に富山について英語でアピールできました。また、留学生の出身国のよさを聞いて、驚くことも多くありました。	英語でアピールできた満足感	異文化等への気付き(異文化理解)
10	あまり緊張せずに話すことができました。他国の文化や国の特徴を知ることができてよかったです。これからもがんばりたいです。	英語を話せたことへの満足感	異文化等への気付き(異文化理解)
11	留学生5人に、富山のよさを伝えることができた。留学生から「この菓は効果があるの？」とたずねられたときは、最初は意味が分からなくて困りました。でも留学生がリアクションを大きくしてくれたので、何とか理解できました。	英語でアピールできた満足感	英語が伝わったことへの満足感
12	留学生はテンションが高く、フラメンコをおどってくれました。これからも、無理だから・・・とあきらめずに、いろんなことにチャレンジしたいです。	次のコミュニケーションへの意欲	

表1: 児童の意識を4つの観点到に分類した表（事例① ようこそ富山へ）

1	行きたい場所を英語で言えるようになりたいです。もしも今後外国の人と会ったら、積極的に英語を話したいです。	英語を話せたことへの満足感	次のコミュニケーションへの意欲
2	友達の行きたい名所が分かっておもしろかったです。	他者への気付き(他者理解)	
3	動作をつなげて相手に反応できました。その分、会話もはずみました。反応するのは大切だと思います。	英語を話せたことへの満足感	表現を工夫しようとする意欲
4	いろいろな反応をしながら、相手1人1人と自分の行きたい名所や見たい物、食べたい物を紹介できました。	英語でアピールできた満足感	
5	東京ディズニーランドに行きたい人がたくさんいました。	他者への気付き(他者理解)	
6	行きたい場所や行きたい理由をうまく英語で言えました。もっと長い会話かしてみたいです。	英語を話せたことへの満足感	次のコミュニケーションへの意欲
7	北海道と沖縄で、行きたい理由が様々でおもしろかったです。	他者への気付き(他者理解)	
8	時計台に行きたい理由として「歴史的」と言いたいとき「ヒストリアス」言えばよいとマシュー先生に教えてもらいました。	英語表現への気付き(言語理解)	
9	私の班では、北海道と沖縄では沖縄の方が人気だったので、クラス全体では北海道の方が人気だったので驚きました。友達の行きたい理由が様々で面白かったです。	他者への気付き(他者理解)	
10	自分の食べたいものや行きたい場所を英語で言えるようになって、とてもうれしかったです。アメリカやオーストラリアの観光名所の中で、自分が行きたい場所を英語で言えました。次は、外国の人と話してみたいです。	英語でアピールできた満足感	次のコミュニケーションへの意欲
11	アメリカとオーストラリアでは、アメリカに行ってみたくて、また、アメリカに行きたい人が多くてびっくりしました。	次のコミュニケーションへの意欲	他者への気付き(他者理解)
12	私は、自然がいっぱいのオーストラリアに行ってみたくて、	次のコミュニケーションへの意欲	

表2: 児童の意識を4つの観点到に分類した表（事例② 卒業旅行に行くなら）

東京オリンピックに行くなら —What do you want to see in Tokyo Olympics?— (H29実施)			
1	いろいろなオリンピックの競技の名前の言い方が分かりました。自分の好きなスポーツを英語で言ってみたくて、	英語表現への気付き(言語理解)	次のコミュニケーションへの意欲
2	たくさんの競技を英語で言えるようになりました。もっとすらすらと英語を話せるようになりたいです。	英語でアピールできた満足感	次のコミュニケーションへの意欲
3	東京オリンピックの種目の英語の言い方が分かりました。私だったら、「高松ベアを見たい」と言いたいです。	英語表現への気付き(言語理解)	次のコミュニケーションへの意欲
4	中学生に英語を話すのが楽しみになりました。それまでに、もっと英語を上手に話せるようになりたいです。	次のコミュニケーションへの意欲	
5	いろいろな反応の言葉を使って、英語をすらすらと話しました。英語の幅が広がりました。	英語を話せたことへの満足感	次のコミュニケーションへの意欲
6	“Me too” “cool” “nice”を使って、相手の見たい競技や選手について、いろいろな反応ができました。	英語を話せたことへの満足感	
7	他の友達の見たい競技や選手が意外でびっくりしました。次は、中学生と会話をするので、とても楽しみです。	他者への気付き(他者理解)	次のコミュニケーションへの意欲
8	友達といろいろな反応ができて、楽しかったです。早く中学生と会話したいくなりました。	英語を話せたことへの満足感	次のコミュニケーションへの意欲
9	いろいろな友達と話せたので、気付くこともいっぱいありました。中学生ともたくさん話したいです。	他者への気付き(他者理解)	次のコミュニケーションへの意欲
10	初めて中学生と会話をしてとても緊張しました。自分の伝えたい英語を使って、中学生にたくさん反応することができました。中学生と会話ができてよかったです。	英語を話せたことへの満足感	英語でアピールできた満足感
11	中学生の発音がよくて、びっくりしました。中学生とたくさん話せてよかったです。	英語表現への気付き(言語理解)	英語でアピールできた満足感
12	これまでの授業で習ったことを、中学生との会話につなげることができたので、うれしかったです。	英語を話せたことへの満足感	英語でアピールできた満足感

表 3: 児童の意識を 4 つの観点に分類した表 (事例③ 東京オリンピックに行くなら)

6.2 ネットワーク図とコメントの観点との関連

図 6 のネットワーク図から分析した (A) ~ (D) の四つの観点は、前頁の ア ~ エ の四つの観点とつながっている (図 7 参照)。つまり、児童のコメントの分類とネッ

トワーク図の結果から、対象 (話す相手や英語表現) への気付きや英語でアピールできた満足感が、次の発話への意欲につながっていることが分かる。

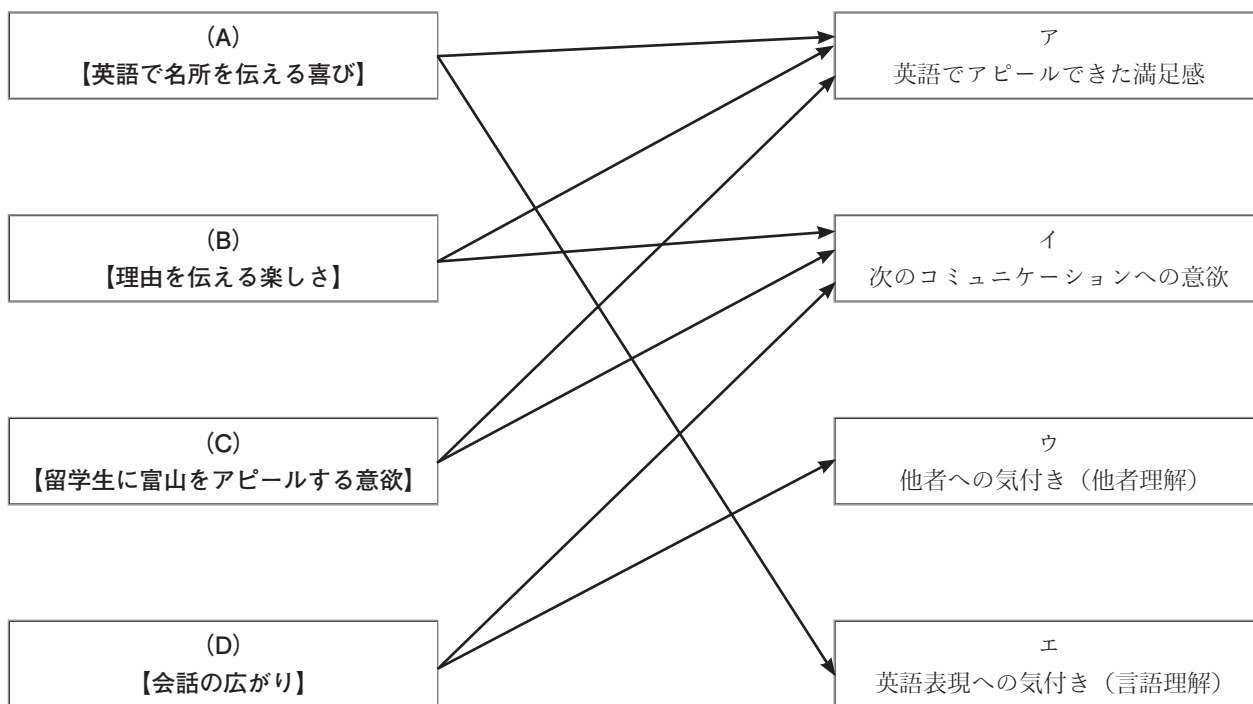


図 7: コメントとネットワーク図の観点の相関性

Ⅶ. 考察

「タイムリーな題材の選択」と「自己決定の場の工夫」という手立てを講じた3つの実践事例をもとに、手立てによる児童の変容を次のように分析した。

- ① 自己決定により、次の発話への意欲となるコメントや活動の様子が見られる。
- ② 「伝える内容」と「使う英語表現」の自己決定が発話への意欲につながる。
- ③ 自己決定による「他者への気付き」「英語表現への気付き」「英語でアピールできた満足感」が、次のコミュニケーションへの意欲につながる。
- ④ 「英語表現や素材への興味・関心」「知る楽しさ」「相手意識」が発話への意欲を高めたり、コミュニケーションの輪を広げたりする。

以上の分析の結果、「タイムリーな題材の選択」と「自己決定の場の工夫」が、発話への意欲の高まりにつながるのである。

Ⅷ. 今後の課題

本実践は「内容を伝える側」、つまり答える側の自己決定を中心とした授業実践による検証である。しかし、尋ねる側が相手に対して「何の好みを尋ねようかな? ○○さんから、スポーツの好みを聞いてみたいな」と質問の内容を自己決定する場面も考えられる。

話し手と聞き手の双方の自己決定が発話への意欲を高めることについて、今後研究を重ねていきたい。

Ⅸ. おわりに

本実践では、「タイムリーな題材の選択」と「自己決定の場の工夫」が児童の発話への意欲を高める有効な手立てであることを検証した。なぜそうした手立てが発話への意欲を高めるのかという要因について分析・整理したことで、手立ての有効性をより明確にできたように思う。

次年度から、新学習指導要領への移行期に入る。外国語活動については、文部科学省の年間計画例案を参考にし、今後も児童の発話への意欲が高まる題材を考えたり、思わず英語で伝えたい自己決定の場を設定したりしながら、授業を工夫・改善していきたいと思う。そして、小学校では、英語で意思疎通する面白さ、相手を新たに知る喜び、いろいろな人と関わる楽しさを味わう経験を多く重ね、中学校での英語の学習につなげてほしいと願う。

謝辞

本研究実践について、研究の機会を与えてくださった富山大学人間発達科学部附属小学校の根岸秀行校長先生、高学年児童と保護者の皆様に、心から感謝申し上げます。

文献

- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東洋館
- 文部科学省 (2017) 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/.../1387503_1.pdf
- 直山木綿子 (2013) 『新版小学校外国語活動 イラストで見る全単元・全時間の授業のすべて5年』 東洋館
- 直山木綿子 (2013) 『新版小学校外国語活動 イラストで見る全単元・全時間の授業のすべて6年』 東洋館
- 西山教行 大木充 (2015) 『世界と日本の小学校の英語教育 早期英語教育は必要か』 明石書店
- 楽山 進 (2014) 『授業をぐーんと面白くする中学校英語ミニネタ&コツ 101』 学事出版
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』 ナカニシヤ出版
- 樋口忠彦・衣笠知子 (2009) 『小学校英語活動アイデアバンク』 教育出版
- 樋口忠彦・衣笠知子 (2012) 『続・小学校英語活動アイデアバンク』 教育出版

(2017年8月31日受付)

(2017年10月4日受理)